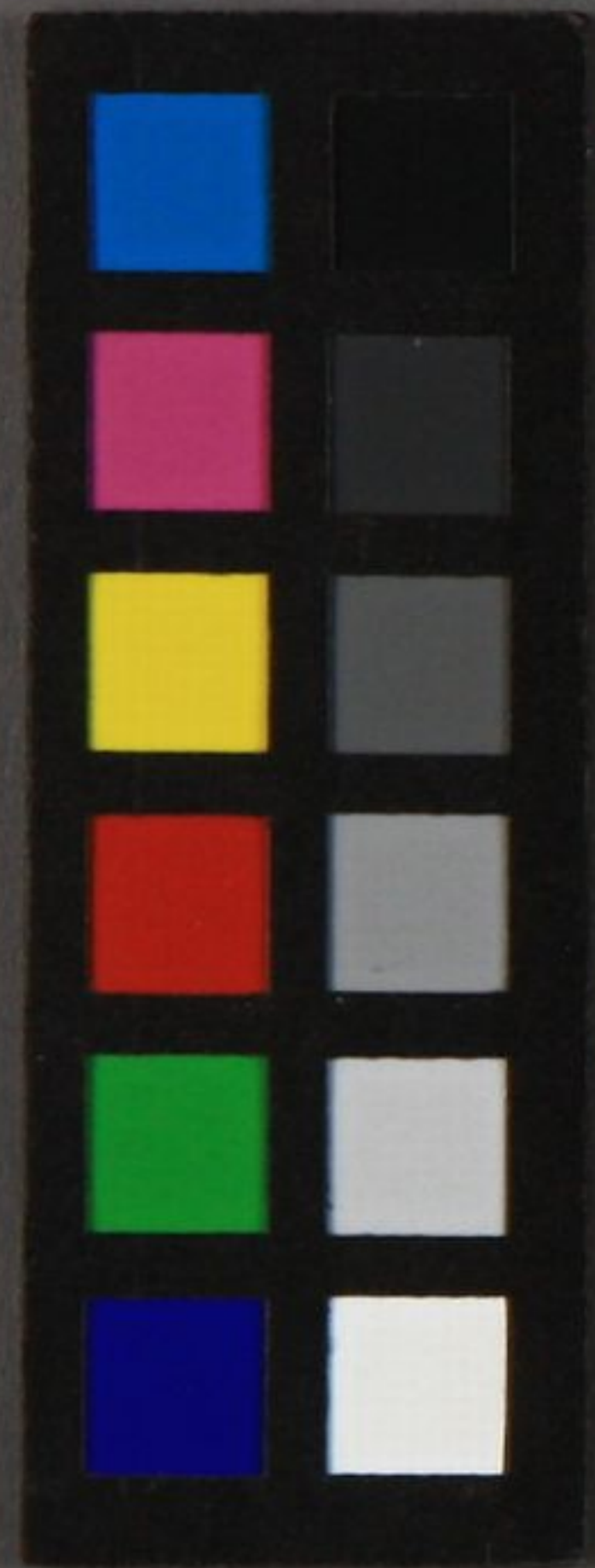


詩集



彌生集

河井醉茗著

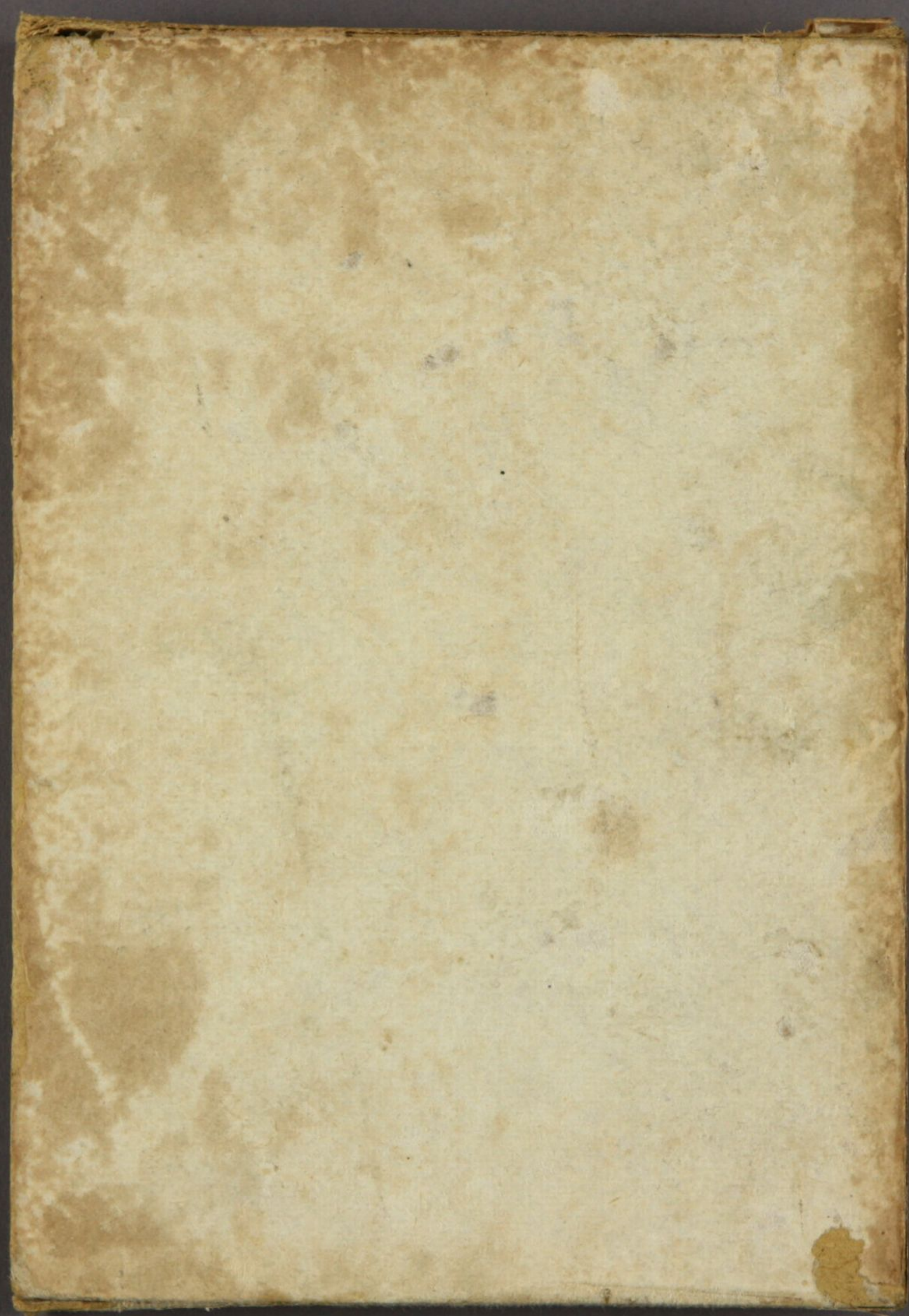


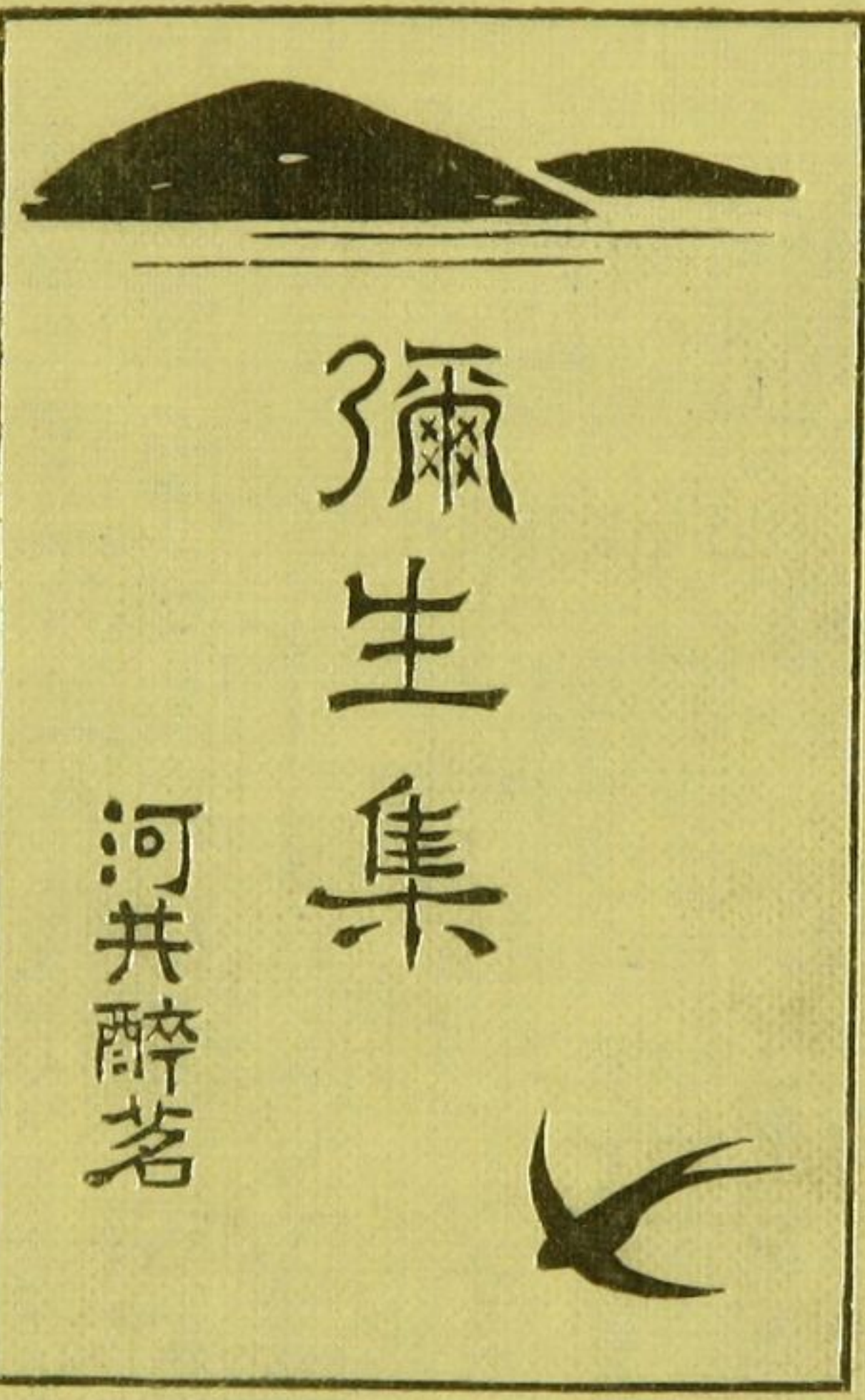
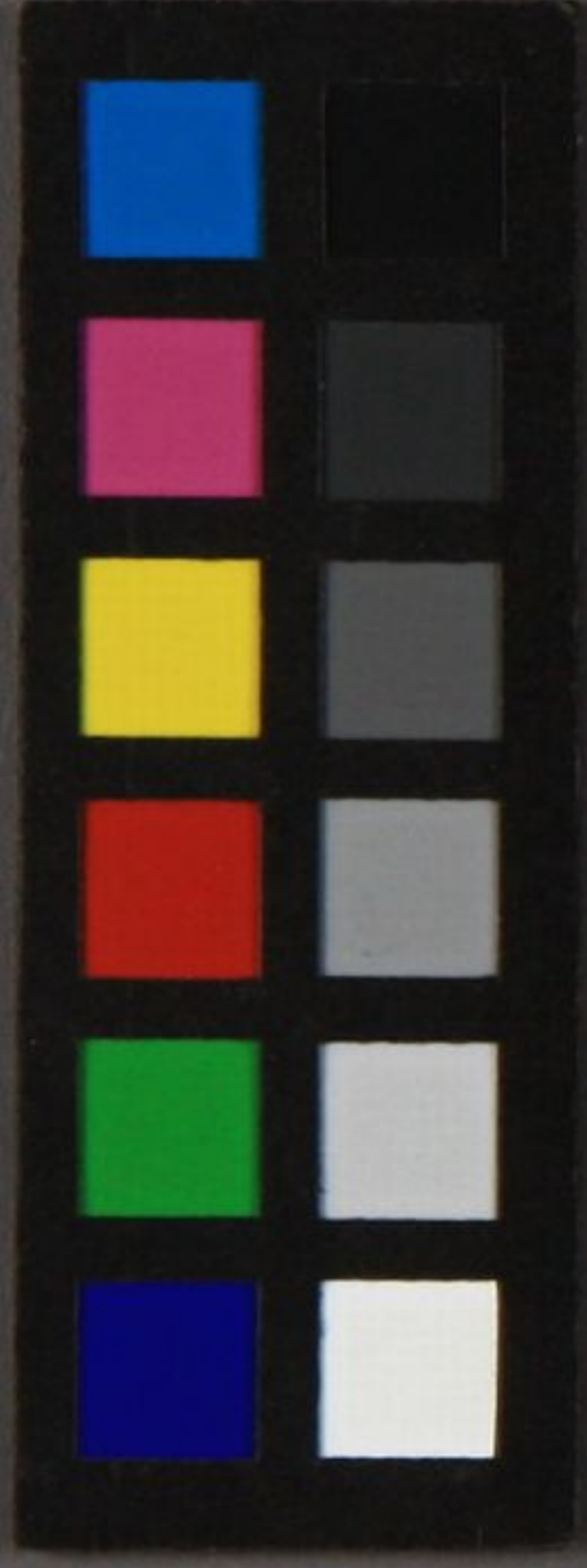


彌生集

河井醉茗著







彌生集

河共醉茗

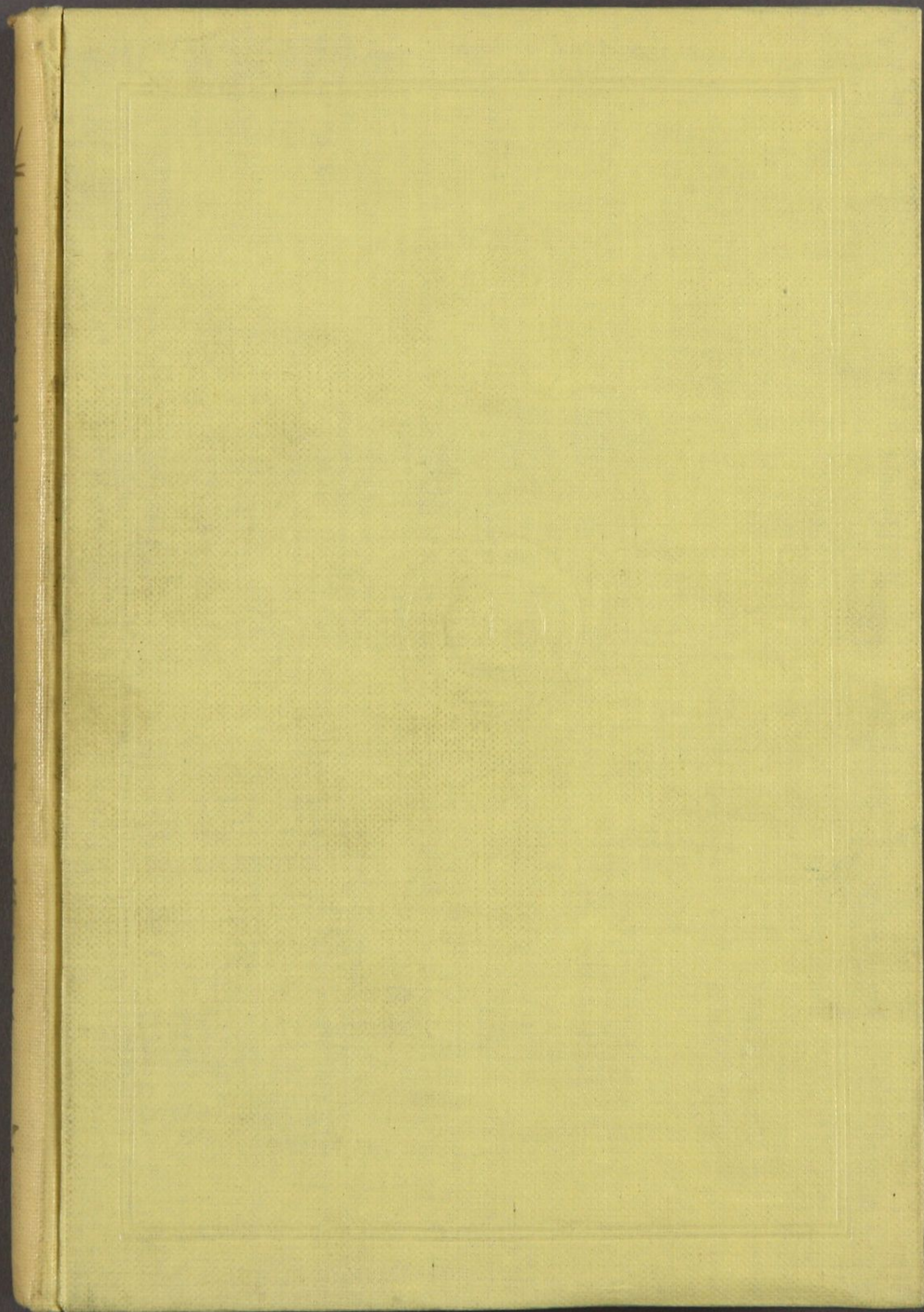




彌生集

河井醉茗著









彌生集

河井醉茗

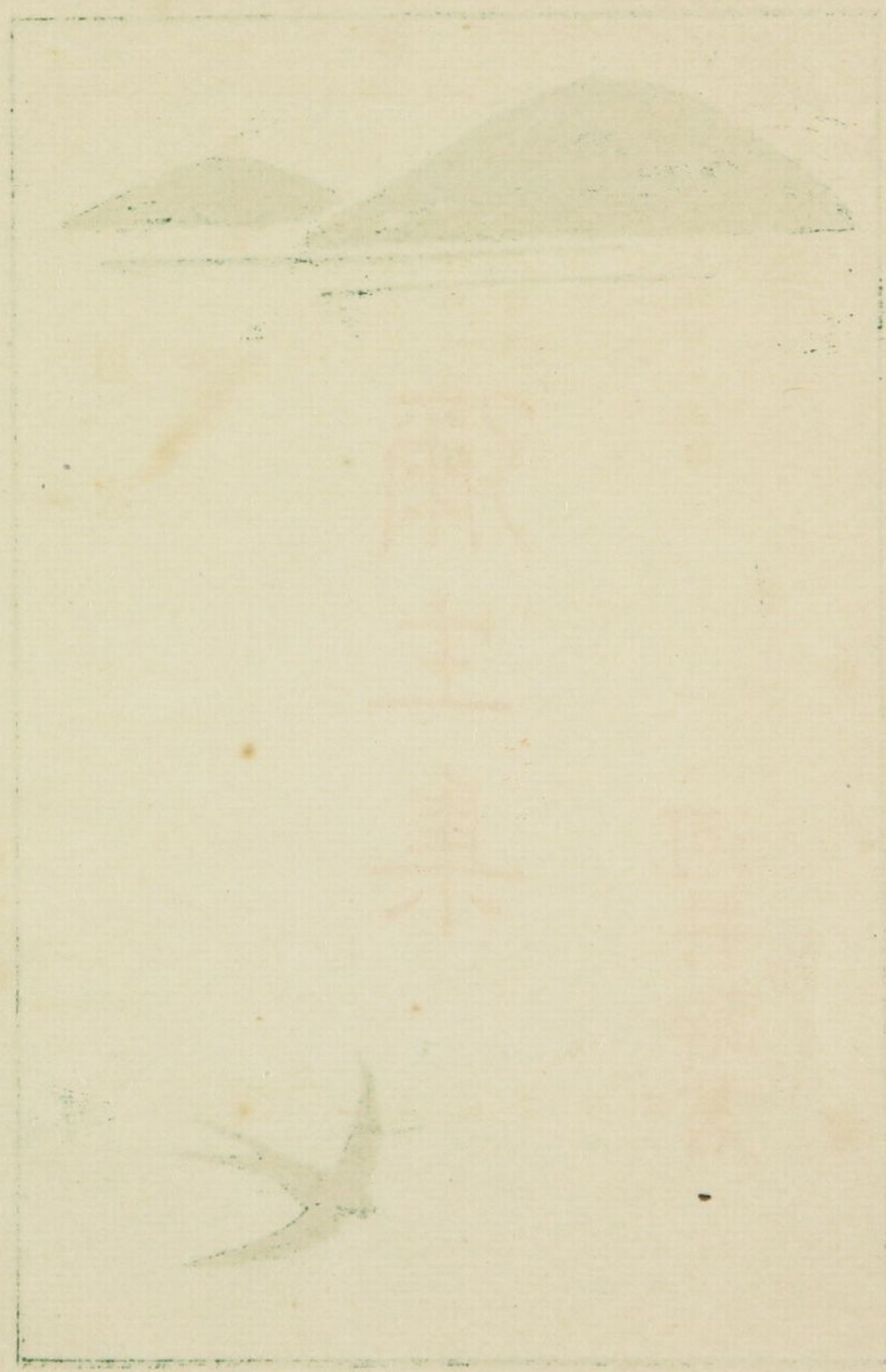




彌生集

河井醉茗





歌集

目次

火の色

- 火の色
- こほろぎ
- 海際の一つの灯
- 晝の燈火
- 微動
- 曠野
- 若き胸ふるき胸

一 二 三 四 五 六 七 八 九 一〇 一一 一二 一三 一四 一五 一六 一七 一八 一九 二〇 二一 二二 二三 二四 二五 二六 二七 二八 二九 三〇 三一 三二 三三 三四 三五 三六 三七 三八 三九 四〇 四一 四二 四三 四四 四五 四六 四七 四八 四九 五〇 五一 五二 五三 五四 五五 五六 五七 五八 五九 六〇 六一 六二 六三 六四 六五 六六 六七 六八 六九 七〇 七一 七二 七三 七四 七五 七六 七七 七八 七九 八〇 八一 八二 八三 八四 八五 八六 八七 八八 八九 九〇 九一 九二 九三 九四 九五 九六 九七 九八 九九 一〇〇

女の群衆

鳥の寢息

鳥の寢息

巖に立ちて

幽霊

夜の化粧

砂書

窓を開け

背ける時計

雪もよひ

柔かい霧
明るい夜

愛のあゆみ

愛のあゆみ

近き厩

土の歡喜

波のあと

覺めたる芽

曉色

柳は青む

鷓鴣

藥

小さな蟲

朝涼

水を興へよ

蘭

球根

小さな蜘蛛よ

葉の散るまで

掃きながら

鼻

11

12

13

14

15

16

17

18

19

20

21

22

クリスマススの頃

古い橋

大きい海よ

冬青樹

隠れた根

愛の培ひ

ふるさと

ふるさと

卵黄色の塀

大きい船

108

109

110

111

112

113

114

115

116

117

118

炬火

絶叫

人間ばなれ

残れる命

動搖

うつむき

私の不思議

炬火

柔かき波

舗石に立ちて

110

111

112

113

114

115

116

117

118

深き眠

林檎

縁側

地下室の金庫

五月

褐色の原野

一人となりて

硝子磨る人

住吉踊

沈黙

119

120

121

122

123

124

125

126

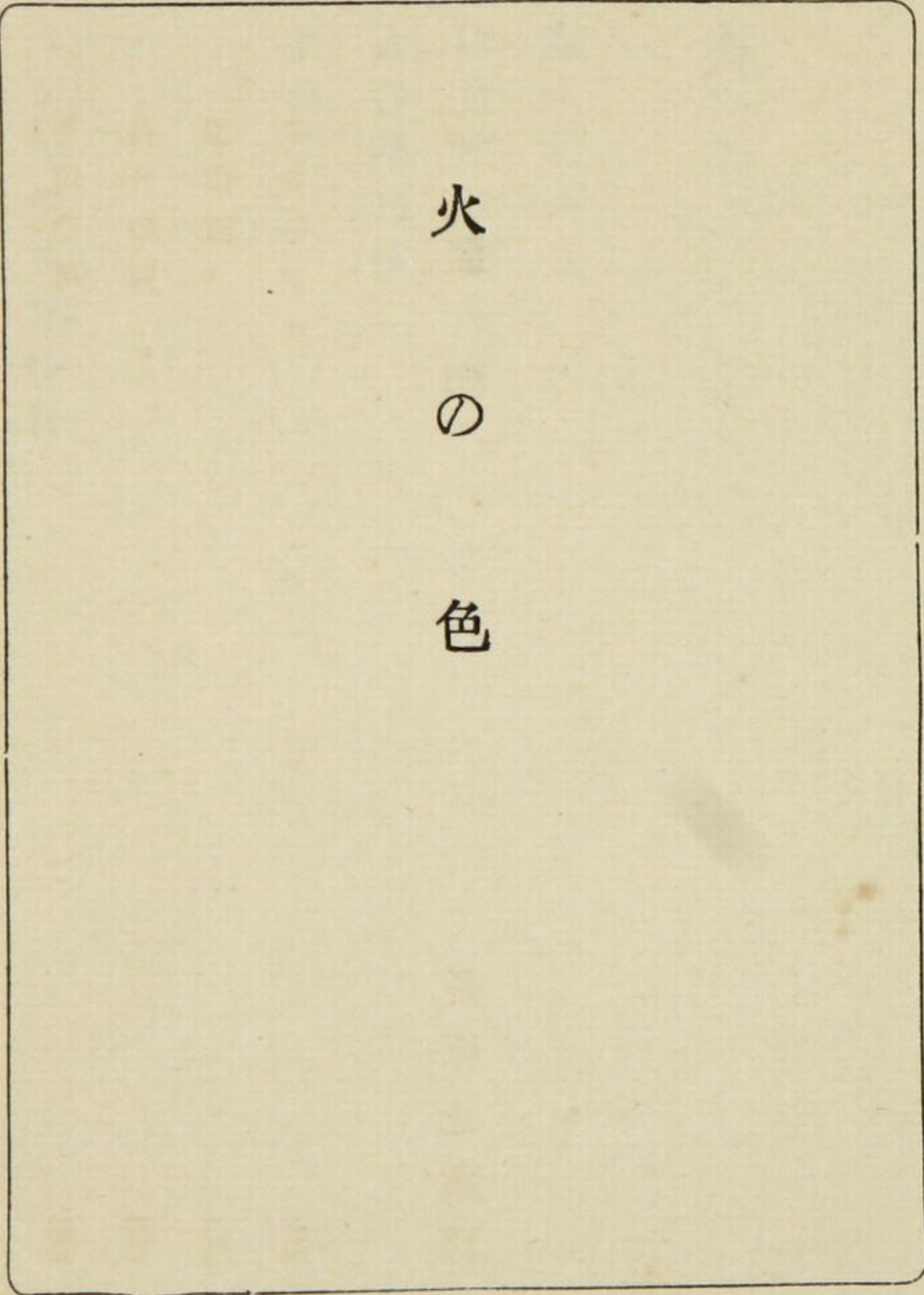
沈黙
沈丁花
明るき室
葉
開かぬ封
花唇
寂しさ
苦き汁
深夜
暗示
如意珠

一八五
一八六
一八七
一八八
一九一
一九二
一九三
一九四
一九五
一九六
一九七
一九八
一九九
二〇〇
二〇一
二〇二
二〇三
二〇四
二〇五
二〇六
二〇七
二〇八
二〇九
二一〇
二一一
二一二
二一三
二一四
二一五

山の歡喜

山の歡喜
湯の湧く麓
ひろき胸
山の町
巖壁の群集
暮色
單純なる線
表情
絶頂さして

二二一
二二二
二二三
二二四
二二五
二二六
二二七
二二八
二二九
二三〇
二三一
二三二
二三三
二三四
二三五
二三六
二三七
二三八
三三九
三四〇
三四一
三四二
三四三
三四四
三四五
三四六
三四七
三四八
三四九
三五十
三五一
三五二
三五三
三五四
三五五
三五六
三五七
三五八
三五九
三六〇
三六一
三六二
三六三
三六四
三六五
三六六
三六七
三六八
三六九
三七〇
三七一
三七二
三七三
三七四
三七五
三七六
三七七
三七八
三七九
三八〇
三八一
三八二
三八三
三八四
三八五
三八六
三八七
三八八
三八九
三九〇
三九一
三九二
三九三
三九四
三九五
三九六
三九七
三九八
三九九
四〇〇
四〇一
四〇二
四〇三
四〇四
四〇五
四〇六
四〇七
四〇八
四〇九
四一〇
四一一
四一二
四一三
四一四
四一五
四一六
四一七
四一八
四一九
四二〇
四二一
四二二
四二三
四二四
四二五
四二六
四二七
四二八
四二九
四三〇
四三一
四三二
四三三
四三四
四三五
四三六
四三七
四三八
四三九
四四〇
四四一
四四二
四四三
四四四
四四五
四四六
四四七
四四八
四四九
四五〇
四五二
四五三
四五四
四五五
四五六
四五七
四五八
五五九
五六〇
五六二
五六三
五六四
五六五
五六六
五六七
五六八
五六九
五七〇
五七一
五七二
五七三
五七四
五七五
五七六
五七七
五七八
五七九
五八〇
五八一
五八二
五八三
五八四
五八五
五八六
五八七
五八八
五八九
五九〇
五九一
五九二
五九三
五九四
五九五
五九六
五九七
五九八
五九九
六〇〇
六〇一
六〇二
六〇三
六〇四
六〇五
六〇六
六〇七
六〇八
六〇九
六一〇
六一一
六一二
六一三
六一四
六一五
六一六
六一七
六一八
六一九
六二〇
六二一
六二二
六二三
六二四
六二五
六二六
六二七
六二八
六二九
六三〇
六三一
六三二
六三三
六三四
六三五
六三六
六三七
六三八
六三九
六四〇
六四一
六四二
六四三
六四四
六四五
六四六
六四七
六四八
六四九
六五〇
六五一
六五二
六五三
六五四
六五五
六五六
六五七
六五八
六五九
六六〇
六六一
六六二
六六三
六六四
六六五
六六六
六六七
六六八
六六九
六七〇
六七二
六七三
六七四
六七五
六七六
六七七
六七八
六七九
六八〇
六八一
六八二
六八三
六八四
六八五
六八六
六八七
六八八
六八九
六九〇
六九一
六九二
六九三
六九四
六九五
六九六
六九七
六九八
六九九
七〇〇
七〇一
七〇二
七〇三
七〇四
七〇五
七〇六
七〇七
七〇八
七〇九
七一〇
七一一
七一二
七一三
七一四
七一五
七一六
七一七
七一八
七一九
七二〇
七二二
七二三
七二四
七二五
七二六
七二七
七二八
七二九
七三〇
七三一
七三二
七三三
七三四
七三五
七三六
七三七
七三八
七三九
七四〇
七四一
七四二
七四三
七四四
七四五
七四六
七四七
七四八
七四九
七五〇
七五一
七五二
七五三
七五四
七五五
七五六
七五七
七五八
七五九
七六〇
七六一
七六二
七六三
七六四
七六五
七六六
七六七
七六八
七六九
七七〇
七七一
七七二
七七三
七七四
七七五
七七六
七七七
七七八
七七九
七八〇
七八二
七八三
七八四
七八五
七八六
七八七
七八八
七八九
八九〇
八九一
八九二
八九三
八九四
八九五
八九六
八九七
八九八
八九九
九〇〇
九〇一
九〇二
九〇三
九〇四
九〇五
九〇六
九〇七
九〇八
九〇九
九一〇
九一一
九一二
九一三
九一四
九一五
九一六
九一七
九一八
九一九
九二〇
九二二
九二三
九二四
九二五
九二六
九二七
九二八
九二九
九三〇
九三一
九三二
九三三
九三四
九三五
九三六
九三七
九三八
九三九
九四〇
九四一
九四二
九四三
九四四
九四五
九四六
九四七
九四八
九四九
九五〇
九五二
九五三
九五四
九五五
九五六
九五七
九五八
九五九
九六〇
九六一
九六二
九六三
九六四
九六五
九六六
九六七
九六八
九六九
九七〇
九七一
九七二
九七三
九七四
九七五
九七六
九七七
九七八
九七九
九八〇
九八二
九八三
九八四
九八五
九八六
九八七
九八八
九八九
九九〇
九九一
九九二
九九三
九九四
九九五
九九六
九九七
九九八
九九九
一〇〇〇



火
の
色

高山の花
白日の霧
遠山雪
さるながせ

装
幀

長原止水氏

二四
二五
二七
二五

火の色

深海の底に沈める
室の氣は重げに落ちる
微なる人の寢息は
おぼめきぬ。

花ランプ

宵のまゝかゝやき燃ゆれ

油吸ふ力をこめて
またくくや火の葉はあへぐ。

今、外は曉闇の
星宮に残れる光
うすれゆく眼路の極みに
見うしなふ。

薄ら明

光こそ地には下りざれ

室はなほ夜のさまして
窓惟の隙こそ見えね。

乾きたる炎の衰弱
終夜倦み疲れし色の
蒼白く燈火やつる
夜明前。

こほろぎ

こほろぎが鳴く、雨と、雫と。

暗い夜の

濡れた草の中に

たくさんのこほろぎが

高く鳴く、低く鳴く。

心もち寝れたやうな

ものしめやかな雨の言ひより。

さびしさの幸味さいはひあぢはふ

床の下に

こほろぎが鳴く、こほろぎが鳴く。

雨にうたれて鳴く聲の

つらさ、かなしさ。

休むこほろぎ

鳴くこほろぎ

忘れてうたふ音色の高さ

わか／＼しさ。

やんだやうな雨の雫が

執着らしう、

考へては落ち

考へては落ちると、

寝入りかけた夜が

ぱつちりと眼を開ける。

しめ／＼と

丘を越え、野を越えて、

わが傍かたはらに

歩みよる雨のさびしさよ

鳴くこほろぎの親しさよ。

かゝるとき、

こほろぎの吹鳴ふきならす

銀色の笛きょくに聞惚きこれて

さまよひ出づる

さびしい姿を

つくづくと見る
あはれなうたの抱き心。

海際の一つの灯

ことごとくの舟に

幸ひあれ、

海の面に

やはらぎあれ。

ゆらゆらと

うごく白帆よ、

ひらひらと
舞ふ水禽よ。

大いなる海は
わが力に及ばねど
夕ゆふなれば
海も光を失はむ。

わが手より
火おくろに

火を移す一つの光
小さけれど、

夜になりゆく海の上
潮暗く星きえて
霧ふかく
かゝるとも、

海に浮べる
人々よ。

見よ、この一つの
あかりを――。

晝の燈火

薄暗き室

晝の光線ひかりと

影射し交しまは

夢の色して

瓦斯の火燃えぬ。

炎のあへぎ

時ならぬ出現

疑ふ瞳に

靑潮の炎の

強きうるほひ。

渴きと疲れ

謠ひ出して花は舞ふ

薄黄色

かげなき反射の

晝のともし火。

微動

夜は深む、

燈火慕ふて飛び交ふ小鳥

さえぐと現れては

またうとくとかくるゝ

ものゝ疲れの眞夜時。

ふと起る柱のぎしみ

たゞならぬ微けき響
ともし火の穂のゆらぎ
花瓣の吐息
大波のうねりは
地の底より動いて
戦慄す。

大地の根には
幾萬の人のうめき聲
生あるものゝ死の叫び

籠れるといろき
海吸ふ力
おどろくしく壊れし土の底に
絶命の鬨を擧ぐ。

外は雲、黒き霧、
空を捲いて下り、
氷の矢、火の矢、
雪のつぶて、山の焼石、
あいろも分かす
すきまなく降りそゞげど

何の音もせず。

胸わくくくと
渾身をめぐる恐怖の血
かゝる夜を
いをぬる人もありやと
かつ疑ひぬ。

曠野

何處にか我が魂は迷へる
寂しき原野
花はうなだれ
葉はしほれたり。

男、女のあしがた
無惨に蹂躪られし土の跡

灰白に乾きはてし
干からびし草の根に
水吸ふ力盡きぬ。

寂寥の野には
焼け爛れし溶岩と
枝なき立木と
歌はぬ鳥と
水なき沼とに
連る空虚

そこはかとなく
さまよふ憂愁
若き幹に凭りかゝり
のがれゆく生の響
静かに聞きぬ。

垂れ下る—
沉鬱の空
懷疑はひとり
はてしらぬ

路みちに上あれり。

若わかき胸むねふるき胸むね

胸むね突つく坂さか

木きの根ね、岩いは角かく

足あし弱よわつれて

しづかに、高たかく

山やまに入いる。

苦くるしげの

息のしたより
物を言ふわか／＼しさ、
登る山の
おもしろさ。

飛行の形

大巖に

鎖こそ下れ

さすが白き手に耻ぢて
ためらふよ。

何氣なく出す手と
何氣なく出す手と
觸るれば強き力ありて
岩の上すらかる／＼し。

草の息吸ひ

木の息吸ひ

息はづませて

白毛樺の幹に

寄り添ふ二人。

若き胸と

ふるき胸と

ふと此處に

言葉絶えぬ。

さら／＼と水音は

葉の上をながるゝや、

晝の木の間の動かぬ光

獸のこゑ、鳥のこゑ。

女の群衆

花が喘ぐ、花が苦しむ

蹂躪られて咲く、強く咲く

燃える、蒸発する

呻吟く、ささやく

密集つた花、うづだかい花

壓搾されて滴る

性のなやみ、香水のかをり。

抵抗し、疲勞した

原色の昏惑

紫の渦卷、朱の沈澱

咲けば咲くだけ

あらゆる花の一つ一つ

壓へられ、搾られて

性のなやみ、香水のかをり。

躍るほどに

動くほどに

しぼる、しぼる、乾くまで

腊葉の色も褪め

正體もなく

眠り入るまで

しぼり、しぼり、しぼりぬく

性のなやみ、香水のかをり。

撈つても、撈つても

花はばらばらに

鳥
の
寝
息

碎けるばかり
たわいない花^{はな}瓣^{びら}の
明るい色からも
暗い色からも
香^{かざり}を、香をと
一つにしぼり、しぼりぬく
性のなやみ、香水のかをり。

鳥の寢息

鳥は寝た。

あんなに歌ひたがった――

あんなに飛びたがった――

あんなに廣い野を慕った――

あんなに美しい聲を惜まなかつた――

鳥が

小さな枯葉の巢を

暖かさうにして
よく熟睡ねいつた。

鳥よ、

小鳥よ。

もだえたり、あこがれたりした
そのかみの夢は
地を離れた花のやうに
萎れてしまつた。

あんなに泣いた涙が
みんな草の下に吸はれてしまつた。
かはいさうに——
あんなに泣いても
やつぱりもとの小鳥。

夜の闇の恐ろしさも
忘れたやうに、
眼を覺まさないで
寝た小鳥よ

小鳥の寢息よ。

巖に立ちて

私はかうして長い間、巖の上に立つてゐます。
立つて下を見てゐると、

鮮かに海の色が透いてきます。

透徹つた青い海の中に

ぐるく、ぐるくと

私の立つてゐる巖を取りまいて
美しい女が廻つて行きます。

幾人かの女が

くるく、くるくくと

後を逐ひ、後を逐ひ

巖の周圍を廻つてゐます。

何といふきれいなきものでせう

かたちくづさず

尾や鰭をふるやうに

しなよく漂ふてゆきます。

ゆるく、またはやく

巖を廻る美しい女は

一人のやうにも思はれ

何人となく

あとから、あとから

廻つてゆくやうにも思ふ。

底の見えない海に

虹のうづまいてゐるやうに

いつまでも、いつまでも、

巖を廻つてゐる女よ。

何故漂ひ去らないのが、

何故海の上へ浮ばないのか、

私の眼からはなれるまで
私も動かれない。
かうして
みつめてゐると
きれいな海へ
私も吸込まれてしまひさうです。

幽 霊

海底の篝火が燃ゆるやうに
無言の郷まちの
水の間を昇る
烟のゆくへ
幽霊のわがまゝよ。

偶然に

昂奮した幽霊の

誰にでも

綻らうとする

ものなつかしい繪の燈火。

朽ちた柱の根より

一匹づつ、後から後からと

無數にあらはれてきて

空に飛んで行く羽蟻の

何うすることもできぬ

幽霊のいま／＼しさ。

薄ぐらい土藏の家の

窓よりは淡日の反射

晝間の瓦斯燈と

電燈のあかり

なやましい幽霊の

黄きいろいうめき。

人間の脂肪で

汚れたやうな古障子に
蜘蛛の這ふ紙ざはり
嫌はれた幽霊の
やるせなさ。

錆たペンさきと
折れたピンとの外に
何もない空な抽斗を
覗いてみる
幽霊のけうとさよ。

夜の化粧

涼しい夏の晩。

もう眠る前になつて女は鏡の前に座つて
白粉を塗つた、紅膩をつけた。
自分の氣に入るやうにお化粧をして、幾度も鏡を見た。
鏡はしまはれた。
派手やかな軽い絹の寝衣と着かへて、扱帯をかたく結んで、ふつく
らした夜着の内に獨で寝た。

すやくくと安らかに寝た——獨で——お化粧した若い女が——。

砂書

深い庇ひさしの蔭に、暗い空氣の漂ふてゐるやうな家並の舊い街、大道の片側に人を集めて、みすばらしい砂書すながきの男が土の上に畫を描かいてゐる。

彼の手からは砂がこぼれ、畫がこぼれる。

手の動いてゆくと、青い砂がこぼれると木の葉が出来、赤い砂がこぼれると花が出来る。

嘴くちばしが出来る、羽はねが出来る、脚あしが出来る、まるで彼の手から飛ばした

やうに鳩があらはれる。
子供心のおもしろさ。

花も、鳩も、家も、両手ですつすつと搔きよせると、見るまに物の象は消えて、赤い砂と、青い砂とが綺麗に分れてしまふ。

物も言はないで、土の上にいるくゝの畫を描いては消し、消しては描く砂書の男は、一日其處を動かない。

久しい間に、其舊い街も、砂書の男も、子供達も、皆何處かへ消えてしまつた。

窓を開け

窓を開けろ、窓を開けろ。

人間の息ですツかり曇つた硝子の窓を開けろ。

息がつまる、蒸暑い、苦しい、堪へられない。

男の息の壓迫に堪へかねて、女の表情が獣のやうになつてゐるではないか。

壓迫 人間の壓迫、恐ろしい壓迫。

混濁した空気を吐く、吸ふ、窓が曇る。

曇つた硝子窓を開ける。

身體が揺れる

顔と顔とが餘り近い

人の袖からは雫が垂れる

じめじめと身體が濡れた油紙のやうになつた。

背ける時計

彼方向いたまゝ動いてゐる置時計、

いつまで脊いてゐても、此方向けやうとは思はない。

見よ！、と人が此方向けるなら、よぎなく見るやうなものゝ、時計

は彼方向いて動いてゐてほしい。

時計の脊いてゐる間、私の生命は歌ふ。

時計の針はあまりに鮮明に過ぎ

あまりに的確に過ぐ。

まらがひの多い
徒爾むだの多い
彷徨さまよの多い私の眼に
正面まへに見るには、あまりに鮮明あまやかすぎる。
時計の息いきはわが息いきなり、
されど——
針の示すやうな測はかられたる生命いのちは持つてゐない。

雪もよひ

あゝ心持が好い
冷たい風だ、鋭すまい風だ、
雪が来るのだらう。
雪よ、降るならどん／＼と降つて
俺おれの歩けないやうに積れ
俺おれは何う歩いて宜いか分らないんだ。

俺は熱して居るぞ
珍しく、ふしぎに、
魂が舞ひ出した。

どつこい

桐の木か

きれいに葉が落ちたな

さあ分るだらう、此温みが

血が通じるだらう。

桐の木、おまへ 汝の幹に

紫の美しい酒がそゝがれてゐるよ。

放すと

俺は瀑布のやうに落ちるからね、

汝には通じる

俺の力が、俺の熱が

咲いてくれ、いつでもいゝから

花だらうが、葉だらうが

咲くなら俺の心のやうに咲け。

もう車庫へ歸つて電車も無くなつた
大通の中央を行つてやらう、

あゝ風が冷たい、好い氣持だ。
街がひろくと明るい
青い灯や赤い灯が
俺の通るのを知らぬ顔してゐる
黙つてゐる
また喜んでゐる
抑へられたやうな家並が
高く低く眠つてゐる。

眠つてゐる街の中を

正直者が一人
夜の眼を覺まして
涙の落るまゝに歩いてゐる。

あゝ息が苦しい
休まう、休まう、
眠れる扉よ、
明るい石階よ
俺にも家があつたか知ら
なかつたか知ら、

あつたやうにも思ひ

ないやうにも思ふ。

俺おれの身からだ體を載せてゐるのは

冷たい石階だ。

血をそゝいでも、酒をそゝいでも

浸透しみこむまい。

立つて行かう

それよりか、雪よ、降れ〜

俺おれを埋めてくれ

雪の中は暖かからう

柔らか〜らう

美しからう

何うしても雪の中でなけりや

此熱した魂は眠らない。

柔かい霧

もたれかけたいやうな
やはらかい霧よ。
薄い雲を透してくる
ぼんやりした月光げつこうに
霧は迷ふ
霧は逃る
いくら行つても

霧は遠い
もう歸らう
私は霧に包まれてゐて
霧を見てゐる。
向ふに霧はない、
私は霧に包まれて
歩いてゐる。

明るい夜

私の生命いのちのさきに
火が燃え上つた
こんな嬉しい夜はない。
ながい〜夜がつゞいてゐると思ふのに
町はまだ宵のやうに
灯火かざりが耀きらいてゐる。

まぶしいほど明るい、
こんなに耀かざりかしい夜よるもあるのに
何故私の夜はいつも暗かつたのだらう。
人は居るかしたら、
居ないかしら
私には見えないけれど、
私はいつ迄もこの静かに明るい夜よるを歩いてゆかう。

愛
の
あ
ゆ
み

愛のあゆみ

私の前には「生」と「死」が横よこたはつてゐる。

森の蔭の

生の家から

森の蔭の

死の家へ行き

森の蔭の

死の家から

森の蔭の
生の家へ歸る。
通ふ路は短い。
路の傍かたはらに立つ大きい樺の木の根を
幾度となく踏んだ。
生より死に
死より生に
私の通つた蹙しむ音は
木の根に響いた。
私の家を圍んでゐる

森の樺よ、
いつまでも、いつまでも、
高く
健かに
立ちてあれ。

近き厩

コツ、コツ、コツ、コツ

板を蹴る蹄の音、

物しづかな夜に響く。

木の芽時、

更けても室の

黄^{きいろ}い燈火の暖かさ。

もう凍らなくなつた夜の途^{みち}
遅く歸る話聲は
女らしい。

まだコツ、コツ

コツ、コツと馬は起きてゐる、

厩に近いなつかしさ。

かゝる夜に

小さな蟲も眼を覺まし
飛んでみたいと思ふであらう。

埋火消えて

ゆるみに充ちた室に
うたゝ寢を思ふ。

馬よ、まだ眠らぬか。

春の夜を

コツ、コツと蹴る蹄の音。

土の歡喜

これが何うして消えるだらうと思はれた雪が
いつのまにか音もなく
大地だいちの彼方に消えて行つた。
あんなにひし／＼と
厳しく築いた霜柱も
何處へか持つて行かれた。
白くから／＼に乾いてゐた街道も

褐色に俯伏してゐた原野も
氣がゆるんだやうに
ゆるやかに胸をくつろげて、
その間から
絹絲のやうな草や木の芽が
長い間堪へてゐた息をホッと吐く。
傾てはのびくとした土の歡喜が
太陽に向つて
地上一面に
あをくと舞ひ上るであらう。

波のあと

波の引いたあと
砂に残つた波のあと。
波のうねりもありのまゝ
濡れた砂地に
取り残されたやどかりが
潮の來るのを待つてゐる。

漂ひかねて
色失ふた海草が
海のぬくもり
潮の來るのを待つてゐる。
小舟から
離れてきたのか、
浮きやうもない浮木が
潮の來るのを待つてゐる。

波の引いたあと、
砂に残つた波のあと。

覺めたる芽

春は一切さいの生命が
生れ變る時だ。
變るなら

何も彼も思ひ切つて變つてしまへ。
私も變らずにゐられない
黙つてゐられない
おちついてゐられない

底から覺めてきて
土の中が自由になると
上へ出てみたい
伸び上つてみたい。
出やう、出やう、
きれいに
出やう。
私が頭を擡もちげたら
空はそれだけ高くなるであらう。

曉色

春の夜は早くあけるので嬉しい、
夜の間の苦みを知らないものには
曉のよろこびが分らないであらう。
一刻でも、半刻でも
夜が早くあけてくれよばいよ。
この悩みから救はれると思ふ時よ、
夜明前の燈火が疲れて

炎がしらむと
戸のすきまもる力づよい光
雲の色がわかれ
爽かな曉氣が
みづみづしく流れてくる。
なやみの眼に仰ぐ曉の色は
何んなに神々しいものであらう。
春は何よりも
夜の早くあけるのが嬉しい。

柳は青む

柳は青む

ゆるやかに、やはらかに、はた伸びやかに。

舗石の上にぞ垂るゝ

薄青き街樹の柳

雨ふれば

泥はねかへす

廣き車道の雨側に

柳は並ぶ、濡色の

春の青みのたゞよひ。

晝の火うごく玻璃戸に

わかしく

影ぞ映る柳の青

さはやかに、はた伸びやかに。

驚愕と

多忙と

また緊張と

都會の行路に

柳は青む
伸びやかに、はたしなやかに。

鸚 鵡

太平洋の海を越えてきた鸚鵡よ
萌黄色の翼を收めて
お前は何を考へてゐる。
こゝろもち首を傾けて
しづかに
お前は何を聞かうとしてゐる。
あふむや、あふむや、

よくきたね

遠い海を越えてよく来たね

心配することはない、

私たちは

お前を大事に、大事にして、

守つてやる。

私たちの言葉が

お前に分らないのか

何をそんなに不思議な顔をして考へてゐる。

世界が異ちがふのか、

こゝもお前の世界だよ。

お前が何んなに考へても

分らない世界だよ。

でも安心しておいで、

誰もお前にわるくはしないから——。

いつまでも考へてゐるより

早くよい言葉をおぼえてごらん。

蘗

木から生へた木よ、其太い幹から別の心持で草のやうに若々しく生へてきた蘗よ。

細い枝、柔かい葉、かよわい姿よ。

烈風が衝いてきても、地が震れても、毒を盛つても、火を煽つても、容易く滅びさうもない石のやうになつた根には、鋭い刃物の刃も立つまい、何うして蘗が生へたであらう。

小さな蟲

地に匍ふものは地に匍ひ、空に飛ぶものは空に飛び、葉を食むものは葉を食み、幹を上るものは幹に上り、花に隠れるものは花に隠れ、水の上を泳ぐものは水の上に泳ぎ、あらゆる小さな蟲は夏の日の下に働いてゐる。

騒がしい人間の耳には、あらゆる小さな蟲の歌つてゐる聲は聞えな
いけれど、夥多おほたしい生命いのちが黙つてゐることはない。

腐つた水にも、朽ちた木にも、塵埃ちみ函びの底にも、毒草の蔭にも、人

の寝る床の下にも、食物の器にも、何處にも、彼處にも充満てゐる
小さな蟲よ。見落されたる小さな蟲の生命よ。
飛べるだけは飛び、歌へるだけは歌ひ、動けるだけは動いても、人
の氣につかない夥多しき小さな蟲よ。

朝 涼

郊外の停車場に近い踏切の灯は
短夜の拂曉を
まだ睡さうな灯のうるほひ。
清淨を司る曉の神が
残つた一つの灯も
フと吹消してしまふと
天地全く晴明。

森をかすめてゐた薄い霧は
香爐の烟のなびくやうに
あとなく消え
聳する木々の葉は皆面を向け
朝の光を待つてゐる。
草の葉に、草の花に、
露が重い
風はまだ息をひそめてゐる。
萬象^{ばんしやう} 心を鎮めて
朝の涼氣^{りやうき}を吸ふ

目の上るまで。

水を與へよ

ゆつくりした夏の夕方
あなたの心の休まつた時に
何氣なく汲んできて
草花の根に灌いでやる水は
何んなに深い恵みでせう。
彼は黙つて
乾いた土の中で

水を待つてゐたのです。
夕方がながいと云つて
うつかりしてゐる人達よ、
あなた方も水をおやりなさい。
大きい自分を
忘れないやうに——。

蘭

鳥の嘴をかさねたやうなデンドロビウムの花から熱い空気が流れる。熱帯の海のとおり、島の巖かげに幾筋となくしらちやけた氣根を垂れて、土から離れて生きてゐた蘭科の植物。

温室の硝子天井から甘い滴が垂れると、

むしあつたい花のほめきと、

花の香、葉の香、眩惑したる花のむせびに、赤い葉の狂氣と、青い

葉の沈鬱と、おもくしい温室の空氣

一切の葉と、花瓣があへぐ。

球
根

霜の降りた朝
球根を掘り出した。

日に照した

水分すいぶんを去つた。

乾いた

干ほした魚のやうに

生せい氣きが抜けた。

併し、

球根は生きてゐる。

土塊つちかたのやうな

乾いたかたまりの中に

燃えるやうな色も

覺めるやうな色も

酔ふやうな香も

みんな隠れてゐる。

さてそれが何う隠れてゐるか
何うみても、かうみても、
呼吸もせぬ
土塊のやうな
乾いたかたまり。

小さな蜘蛛よ

掃いたばかりの朝の室。
人のゐない天井から
絲を引いて下りて来た
小さな蜘蛛よ。

宙にぶらさがつて
動かぬ蜘蛛よ

降りるなら
早く降りよ。

今に草も枯れる
葉も落ちる
遠い高原の山々には
雪がかゝる。

花は温室に、
こほろぎは床の下に――。

蜘蛛よ、地に降りて
早く行け、あたゝかい土に――。

葉の散るまで

山から歸つてきた人も
海から歸つてきた人も
故郷から出て
學校の門をくゞる人も
研究室から出て
講堂の階段を登る人も
凡ての人が

やがて、やがてと思つてゐたその時が來たやうに
わきめもふらず
わが指す方へ急いで行く兩側の歩道よ。
日蔭をつくつてゐた行路樹は
もう春の倉稟に收はれる時が近くなつたので
早くも櫻の葉は朱のやうなきれいな色に透いて
晴れた空に
やがて散りさうに見える。

掃きながら

葡萄のふさの透いてみえる
秋の日の雨上り、
濕つた土の上に
撒いたやうに
白萩の花がこぼれてゐる。
子供のやうに
掌に拾つてみたが

思ひ切つて
掃いてしまふと、
もう直ぐあとから
白い花がこぼれてゐる。
よく咲いて
よくこぼれる花だ。
こぼれた花は
忘れたやうに
あとから、あとからと
よく咲いてゆく萩の花よ。

梟

ホーウ、ホーウと梟が啼く。

夜の森の闇黒な中で獨り啼いてゐる。

何の鳥も寝てゐるのに

息もせず寝てゐるのに

寂しい

物ほしい

暗い、と

森々とした暗い世界に啼いてゐる梟よ。

時にぬくまつてもゐないで

闇の奥に何を見透かさうとして啼いてゐるのだらう。

一つ枝にとまつたきり、更けゆく夜に血を啜つてホーウ、ホーウと

啼いてゐる怪しの梟よ。

クリスマス頃の

雨は忘れてしまつたが

日かげの霜柱は

さく／＼と崩れる

土は白く乾き切つて

落葉がかさ／＼と舞ふ。

幼き子等は

日あたりのよい室へやに集り
漬菜つけなあらふはした女は
井に水の少くなつたのを憂ふ。

雪は秩父の彼方まで
來てゐるであらう、
山の見える庭さきに
碎かれたまゝ、
厚い氷が凍こもりついてゐる。

その頃に
山の手から下町へ出る
珍しさ。

クリスマスデコレーションの
櫻の枝々は
春のやうに麗はしく
シヨウウインドウの
サンタクロースは
上流の家族の

通りかゝるのを待つてゐる。

見れば欲しいカードばかり、
さて何に使はうかと
考へながら通り過ぎてしまふ。
獨逸のお伽噺や
佛蘭西のポンチ畫や
新しい繪の色彩が
心の調子を變てしまふ。

香料入のレターペーパーに
「クリスマス」とばかり
金ペンの走り書
不思議の繪を仕込んである
万年剪刀を一挺
量の少い速達にして
店さきから直ぐに
知つた人に出す
暮の町のおもしろさ。

古い橋

築地あたりの
低い
平らな街から街へ
渡してある古い橋。

橋の上から見える
大きな建築の

尖つた屋根の上に
ねすみ色の雲が漾ふ。

水を買ひに上陸たらしい
人のゐない荷足船が
だぶりくと河に揺られて
舷の藁屑が動く。

灯し頃の何かの火が
河に映つて

絶えず戦慄してゐる
舊い橋の夕暮のため息。

大きい海よ

大きい海よ。

大きい海が、一段、一段、一段とうねりながら私の方へおしよせてくる。

胸が顫ふ。

海に吸はれた瞳よ。

もう、もう、あの大きい海が押寄せてくるのに、私は何を思ふまもない。

遠い山も

山の上の雲も、

濶い水平線も、

うねりながら海と一しよに動いてくる。

單調な海の反響が、

丘と、空と、地と、私の胸とに

絶えず傳はつて、

大きい海が、

此方へ、此方へと押寄せてくる。

冬 青 樹

葉もあたりまへ、
枝振もあたりまへ、
知らない間に
小さな白い花が咲いたやうだが、
いつのまにか小さい青い實になつて
青い實が黒くなると
小鳥が氣附いて食べに来る。

よけいに茂りもしないが
よけいに落葉もしない。
冬が來ても
どの葉も、この葉も
同じやうに呼吸をして
同じやうにあをあをと
静かに
目にたゝない冬青樹よ。

隠れた根

葉も枯れた、莖も枯れた、
枯れた草は影も形もない。
土の中にかくれた根は
ほんたうに自分の生きた心を
しつかりと抱いてゐるであらう。
かづいてゐる土は
毛布のやうにあたゝかくなつて、

大切な強い生命を

ゆつたりと其の中に休ませてゐるであらう。

何にも知らずに

降つてくる雪は

何故此處の土は温かいだらうと思ひながら、

隠れた草の根の上に

降つては消え

消えては降り

しきりに降るであらう。

何んなに雪が降り積つても、

隠れた根はあたゝかに
生く日の幸ひに埋れてゐるであらう。

愛の培ひ

大地と大空と遙に相接する廣き野の
丘の上に立ちて
わが魂は語ふ。
眼に映るものは皆鮮明に
凝視するわが生命の確實さよ。
わが魂は碎けんばかりに苦めども
棄てず、傷けず、

大切に

わが有^もてる限り強く、温く抱^もき有^もたむ。
ともすればわが魂は碎^{くだ}けんとするに

神よ

絶えずわが傍^{かたは}らにありて

わが魂の愛を培^{つちか}ひ

わが魂を厳しくみまもりたまへ。

ふ
る
さ
と

ふるさと

ふるさとよ。

私はお前を嫌ふのではない、いつも思つてゐるのだ。

私の夢の脊景にはいつもお前の姿があらはれてくる。

少年の時には、私とお前とは仲がわるかつた、けれども、もういつのまにか仲なほりをしたのだ。

お前はするぶん私を苛めた。

私を知らなかつた、

私もお前を呪ふた、

私がお前と別れる時には、ふりむきもしなかつた。

それなのに、私のうたの遠い首途かどの日を思ひ返してみると、お前の言葉がちやんと残つてゐる。

今、お前に會つたら、お前は他を向くかも知れないけれど、私はお前としみじくと話してみたい。

ふるさとは、もう私の歸る所ではなくなつたけれど、對むかつてみれば、物を言はないでも心を知り抜いてゐる人のやうであらう。

雲のやうに遠い山や、水の少い河や、おとなしい海や、庇のかげの暗い家や、單調な町筋や、お前のやうな穩かな土地に生れた私が、

かうして烈しい都會に永くゐて、せめては面がはりの少いことをお前に誇りたい。

あゝ我がふるさとよ。

卵黄色の塀

長い、長い間を、歩いてても、歩いてても、卵黄色の土の塀に沿つて行くので、もう單調に倦いてしまつた。

向ふから來る第一の人に聞くと、行ける所までお行きなさいと云つた。

第二の人に聞くと、行けば變つた所があるから行つて御覽なさいと云つた。

けれども、少しも變つた所へ出ない、歩いてても、歩いてても、らんくわうしよく卵黄色

の塀だ。

第三の人に聞くと、早く此黄色の土の塀を離れないといけなると云つた。

私は離れやうかとも思ふ。

併し、その土の塀に吸はれるやうに、少しも休まずに歩いてゐる。

大きい船

海の上を船が進んで来る。

若しあの中に、私に反抗さからふもの、私を壓するもの、私を知らないものが乗つてゐたら、私は彼の船を覆くつがへしてみせる。

何の船も、何の船も、私を乗せてくれないけれど、さて覆してやらうと思ふやうな船も来こない。

小ぼけな船ばかりだ。

大きな船が来てほしい、乗せるか、然うでなけりや覆してやらうと

思ふやうな大きな船が来ない。

絶叫

床板を一枚あげて見ると
下は火だ。

静に下して置く
何の事もない。

また別の床板を
一枚あげてみると下は火だ。

あつい、
真紅な火だ。

板の間隙から覗くと
何も彼も
火になつてゐる。

私は踊り上つて
叫んだ。

「今に燃える、今に燃える」と。

人間ばなれ

人間が嫌ひではない
誰にでも近づく
まれ誰にでも遠ざかる。
遠ざかつてゐて、いつも胸の中にある人と、
近づいてゐて、いつも胸の中にもない人と、
何かの機会ばつぱに
會つたり、離れたりしてゐる。

かう人間ばなれがしてゐてはいけない、
あの人にも會はふ
この人にも會はふ
そして、皆みんなに會つてみやうと思ふのだが――
その間に、
あの人もなくなり
この人も去つてしまひ
ある人も知らずにしまふのだらう。

残れる命

私にはまだ生命いのちが残つてゐる
残つてゐるだけの生命いのちの火を
ふりてらし、ふりてらし
よい途に捧げて行く。

私の所有する生命は
星の瞬くひまに

盡きてしまふかも知れない。

私の護つてきた生命いのちは

豫現であつた。

私の残つてゐる生命いのちにも

亦約束あれ。

動 搖

こんな静かな晩に何が動いてゐる？

微風——草の葉の呼吸するやうな微風もない。

大氣の沈黙

壁のやうな夜の大空

暗い力が押してゐる。

けれども

小さな火の雫のあへぎ、

露のたゞよひ、

芽の成長、

苔のふくらみ、

葉は思ふやうに開き

枝は思ふやうに伸びる。

人の動くよりも

大きい自然のゆらぎの

静かな晩。

うつむき

私の心はいつもうつむいてゐる。
もつと人を見たらよからう
もつと空を仰いだらよからう
もつと遠くを望んだらよからう、と然ふ思ふ時だけ、心は仰向く。
またいつのまにかうつむいてゐる。
心は沈んでゐるのではない、暗い方ばかり向くのではない、眠つてゐるのではない、地上を見てゐるのではない。

たゞうつむいてゐる心よ。
ある花のやうにうつむいてゐる心よ。
知らなかつた。
私はいつこんな心を持ったのだらう。
心のうつむいてゐるのが悲しいのではないが、
私のうつむいてゐる心を見出したのが淋しい。

私の不思議

私の心はいつから動き出したのでせう、
私の生れた日から動いてゐたに違ひない
否、私の身體からだの生れないさきから動いてゐたに違ひない
何ういふ機會はつみで動き出したのでせう。
私には分らない
分らないほど遠い／＼前から
私の心は動いてゐたのです。

私の心はいつまで動いてゐるのでせう、
私の身體の滅ぶ日の來ることは
私にも分つてゐる。
併し私の心の滅ぶ日は私に分らない
遠い／＼さきまでも私の心は動いてゐさうです。
全體私の心は何處で動いてゐるのでせう、
見て下さい
私自身では

頭の中で動いてゐるやうでもあるし
指頭で動いてゐるやうでもあるし
胸で動いてゐるやうでもあるし
足端あしきぼで動いてゐるやうでもあるし
全身に動いてゐるやうでもある。

見て下さい、

よく見て下さい、

あなたなら分ります。

私は今あなたの胸の奥へ入はいつて
私の心が動いてゐるやうに思ひます。

あなたの前で

私は黙だまつて

ながく

あなたが分るまで

私の心をじつと凝ひら視めてゐませう。

炬

火

炬火

星は闇夜に輝けど
白き手に
かゝげられたる炬火は
明らかに照らせり。

上に燃えつゝ
空には炎

下に燃えつゝ
地にはかげ。

光と共に

炎と共に

暫くも休まずに

炬火は動けり。

空は静かなれど

火は動かんとする方に

動きつゝ、うづまきつゝ
動く、さかんに――。

柔かき波

晝の灯の

紗を透いて、青き波

紫の、朱の、褐色の、

波の紋織、つばさ織、

白妙の羽衣の毛は

天上の暖き雪を降らせ

浮べるは雲、沈めるは水、

流るゝ光は青くうすれ

紅く亂れ、

蝶の羽の瑠璃光

晶玉の輝き、眞珠の潤ひ、

陽炎燃え、鳥動き

重なり折るゝ波のあや

捲く、展べる、はた縮み、

幾重のふかさ大姿見に

映るは色彩の波の清搔

若き女は

今、眼もあやに

香に蒸され

胸のときめき

榮えの宮を

踏みとどろかす

柔かき波

ひゞきのよさに

誘惑^{さそは}れてゆく

魂のゆらめき

紅潮^{くれなゐさ}して

氣を失ひぬ。

舗石に立ちて

禁斷の掟立てたる
御料林、五位鶯住みぬ。
武藏野の丘に隠るゝ
新しき驛のしづけさ
時間表、時は移ると
あざやかに窓にかゝりぬ。

なめらかに敷かれし石の
一ひらの上に立つのみ。
ふと來る、音なき翼
日はかぎり櫛の葉かげも
きらめきもうすもの被たる
油照あぶらてり、光は倦みぬ。

寂しさにを彼方人の
我わがうへを想ふやいづち
いづちとも今こそ知らね

想はれてうら問ふ人の
ありとのみ胸に應ふる
我靈の大き現示。

此處に只瘖せたる人の
鋪石を踏みて立つのみ。

あゝ彼方、靈の力を
空震ひ轟く巷

あるは野の荒たる森に
試しみる人しもあらむ。

現實さびしき時に

靈魂のつとめの廣さ

正しさを明らかに見ぬ。

日はさしぬ樹に陰ありて

鋪石を離れし我は

運ばれぬ電車の中に。

深き眠

丁字咲いて

あかり細く

袂かづく

夢の人の

寢息かよふ

霧の濕り

夜の室は

いたく更けぬ。

三ころ四ころ

其名呼べど

後ろ向きの

圓き肩に

若き髪の

香こぼれ

魂はふかく

ねむり落ちぬ。

林檎

焼いた鴨の

香ばしさと

刻んだ玉菜の

いき／＼した葉。

秋の料理の

あた／＼かな心持

こまやかな香氣が
盛花の上になほよふ。

立食はたけなほに

談笑のさどめき

食堂の重い空氣に

飲料の甘き刺戟。

かゝる時

皿の上なる

林檎の赤さ

圓さ、つや／＼しさ。

脂肪^{あぶら}じみたあとに

さく／＼と

淡泊^{たんぱ}な果物の

みづ／＼しい充實。

林檎よ、誇れ

自然の味ひ

美しい色のまゝに

木から直ぐに來た林檎よ。

縁側

縁側の廣さと

心のやすらかさ。

たいくつしたる疊の上よりも

縁側のあるさと

空の近さ。

あをくくと

緑の光線くわうせんを吸ふ

縁側のかいやり

觸さふつてみたいやうな

庭木にぎきの葉末。

夏の日光の

地上を照らす健かさ

心は事業に

大きく歩む縁側の

はてよりはてに。

黙想もくそうの

縁側えんがわづたひ

清きよげなる少女しょうじよは

香かほしきカフエカフェーを注つぎ

埃及エジプトの煙草たばこを供ともふ。

室むろは別べつに

わが縁側えんがわを持もつ

うれしさと

はれぐしさに
カフエカフェーを飲のみ、煙草たばこを喫すふ。

地下室の金庫

冷かなる石の階段を

地下室に降る

微かなる晝の光線。

滑澤なる石の床

電燈の黄色に眠る

長き室のほのぐらさ

石の柱に巖然と

はた寂然と

扉しめたる金庫ぞ竝ぶ。

海より下に

森より下に

あらゆる人の踏む蹠音より下に、

兌換紙幣の積量と

金塊の重量と

黙然たる

金庫の扉閉ぢたり。

五月

夏の空氣は爽さわやかに
いろある如く流れきて
都會の空は只かなた
地平線のみ青きかな。

息張いきばりつめし野の胸に
日はひろくとさしわた

り

土と光のよろこびに
生ものゝ舞ふ時は來ぬ。

新墾道の兩側に

若き雑木の葉は燃えて

一つ一つに伸びんとする。

強き言葉は現れぬ。

樺のみきの藁ひこばえに

若き其日や懐おもふらむ、

森はさすがに舊りたれど
夏こそかへれ、木より木へ。

布をしぼればあざやかに
窓は五月の野に對むかふ、
わが生活は静かなれど
生命いのちは今日も新しからむ。

褐色の原野

日は三月の初旬はじめなれど
荒涼たる東北の原野は
一面に暗褐色を帯びて
地に青むものなし。
村より村に道はあれど
人もなし。
石置きたる農家の庇の蔭に

雪は消えじと凍りつきて
褐色の杉の樹は
斜めに傾けり。
近き山の向ふの山は
殆ど雪
晴れゆく朝空に
白く輝きいでよ
日に向へり。
日は上れど
光なき

褐色の原野
時は三月の初旬はじめなれど――！。

一人となりて

一しきり

笑ひとよめき

どやくくと

表に出でぬ。

つむじ風

風たるあとの

家のうち
静まりかへる。

啄木鳥きつぎの

まなくときなく
つゝかるゝ
つらさはあれど。

たゞ一人
まもるとなれば

わが力
なゆるを思ふ。

次の室むろに
人のたえまを
ひろくと
ランプの光。

明るさに
生命いのちやつれし

生贄いひねは
勞つれてありぬ。

硝子磨る人

強射つよいる光

硝子を磨くぎしくと
砂と石とのすれきしむ
響は胸を食ひしめる。

またぎしくと金剛砂
鑽粉塗ればどろくの

泥にとろけて灰色の
硝子の嘆き。

磨きあげたる板硝子
水にひたして透かしみる
「まだ曇つてる」ぎし〜と
硝子は泥に——。

硝子と硝子輝きの
照らし合ふ間をぎし〜と

泥硝子する
さりげなく——。

住吉踊

樂人出でし住吉の

道化た男三五人

安立町に遠男小野に

住吉踊を一まはり。

白のまる袖松染めて

赤前垂をしたゝれて

傘の柄たゞく歌ひての
住吉踊を一はやし。

麥藁笠の眞俯向

御田を植ゑてこはゞつた

指先そらす團扇ぶり

住吉踊を一くさり。

松は目出度や若松さまよ
曳けば小松のあとたえぬ

うたひはやせや敷津浪
住吉踊を一をどり。

熊野権現一夜に
潮をまはした濱口も
皆新田に埋もれた
住吉踊も一さかえ。

沈

黙

沈黙

夢の海、底に底にと
「沈黙」のはてなき深さ
劫初より我が傍らに
侍らひて燭火さゝぐ。

燭火のしるべはあれど
行き得ざる我が「沈黙」よ、

唇の強き衝動に
火は消えぬ、魂は浮びぬ。

海面のひろき限りを
唇の波こそうねれ、
波の穂の一つ一つに
根なし水よせかへるのみ。

また沈む「沈黙」の海
ふり照らし、ふり照らしゆく、

火の渦に、驚くばかり
たくなはる深さを知らむ。

「沈黙」の海の底ひに
我が愛はあへぎて寄り來
我が魂の香の果實は
美しくしき形に現す。

「沈黙」の海の底ひに
なほ知らぬ「沈黙」ありて

あゝ遂に、言葉の力
滅ぶ日を眼前見ぬ。

沈丁花

春より早くつゝましく
生命を承けしその日より
心に添える身ざまとて
寂しき花の沈丁花。

目覺ましき世に隠れんと
自らつくる花束の

紫さしゝ一ふさに

春はありやと疑はる。

しめやかなるは黄昏の

古き花瓶の繪なる花

暗きに浮ぶ銀泥の

夜な夜な夢に刻まるゝ。

不思議に包む香持ちて

近よる人を黙さしむ

伏眼の底におもひごと
潜める花の沈丁花。

明ろき室

あな零るゝに傾くに
瓶子さゝげて振りかへる
時はたまゆら室は今
あやしき晝の光さす。

窓は緑の葉に隠れ
波うつ水を盛り上げて

寄り添ひ来る魂の
強さ、面に輝けり。

今くつがへる瞬間の
瓶子の水は迸り
鳥は梢に音を止め
花は鬱金の息を吸ふ。

觸るゝばかりの時と時
窓の木葉に翩翩り

みるく 晝の幸は
明るき室へやに消え失せぬ。

葉

一言ひとことの葉を開くにも心より
生々いきいきとひらき出でたるこゝろよさ。
一言の葉のたましひのわづらひに
口くちごもりて力なき葉は地に落つる。

活動はたらきに覺めたる時は貝の葉を
蒼海あをうみの深さに探りはぐくみて

濃き油其葉に盛れば生命ある
くれなるの潮、火となり燃ゆるらむ。

若き日に戀する人が息の緒の
打ふるふ聲と聲とを口づけて
すきとほる胸と胸との愛し
戀ならぬ不斷の我の影に添ふ。

わが言葉、空ゆく雲のひと時も
人の世に同じ姿はとゞめねど

むかへば自然其時の表現を
表はさむ外に二つの姿なき。

けざやかに花冠する白口を
うらうへに素肌の人には誤解られ
忌まれ探られ捨言を落葉の
森蔭に透かし見つゝも怪訝めり。

開かぬ封

風ある日のみあをあをと
そよぐと見ゆる草の葉の
一息ごとに静かなる
生命の波のよするかな。

わが持つものは盡^{じん}未^み來^{らい}
相^{すがた}にかはりあらねども

淋しき草とはてゆかん
運命^{さだめ}は星に現れぬ。

何の煩悶^{もだえ}も抱かずば
鳩^{はと}の胸毛^{むねけ}に光澤^{つや}なけむ
人善^{さか}き性^{さが}になれども
もだゆる夢の巢にかへる。

幾世か前につながれて
幾世か後の弓に張る

其一端の緒に觸れて
韻律を擧ぐる折もあれ。

開かぬ封はとこしへの
生命に添えるかづけ物
なやみはあれど捧げゆく
魂のゆらぎの美はしく。

花 唇

かたき思ひにつぼむ日
むすぼゝれたる唇。

かすかにゆるむ魂の緒
にほひありげに息づく。

くれなる深く氣ざして

生日の足れるあらはれ。

大海原の一波

ゆたにたゆたふ唇。

寂しさ

唇開く力すら

鐵扉てつびの奥に奪はれて

應こたへぬ人と嘲けられ

人の語るは花やかに

たゞ地の底の耳に聞く。

寂しさよ汝は春空はるぞらの

問をうかゞふて來ずもあれ
日あしに雲のかゝる如
みるく地のかげりゆく
わが寂しさよ來ずもあれ。

離りてありし遠妻の
心たがへて幻覺の
かき消す如く失せにたる
光を逐ふてあらぬ空
向ふ眼差にぶりゆく。

生血の流れ堰れては
滅亡の時や近づきし
掌乾き座は冷えて
暗うなりゆく燈火の
捻のゆるみに消え落ちむ。

わが寂しさは根なし雲の
通ればもとに晴れゆけど
いつを定めず湧出でゝ

おもくしくも限かぎをなす
あゝ寂さびしさよ來きずもあれ。

苦き汁

草莖くさこぎの 苦くき汁じゆ
針はりさして そゝがれぬ。

ゆるがじと かまへたる
わが靈たまの こもり殿どの
根ねゆるみて 落窪おちくぼむ。

これやはた 強かれの
さからひに 抑へたる
あざむきの 現れて
火の蔓に まつはれぬ。

苦き汁 そゝがれし
身のしびれ いえがてに
よろぼひて 日に向ふ
はな葵 生く廻り
足ぶみを たてなほす。

深夜

闇黒の おくに
我いのち 覺めぬ、
物の音 絶えて
いつとしも 知らず。

劫初より 燃ゆる
不斷の火 しづく

一刻さきま落ちて

さゝやかなの光。

しづかなる脈は

何處かにうてど

形せるものは

遠き世にゆきぬ。

美しき花に

精あらば出でむ、

深き夜のゆきゝ
いのちのみに。

身動きし刹那

魂はかへり

睡眠さるみのかげに

わが姿うつる。

暗示

年のまはり 女の厄

跪くや 大廣前

あらたかなる 験を垂れて

さきはひある 札をたまへ。

わななく手に 開く啓示

まぎれもなき 御籤の文字

眼のかゞよひ 大き「凶」と
暗き光 胸に射しぬ。

世は白日 人はこゝに

うしろめたき 陰影も添はず

清浄なる 神の庭に

あゝ災禍 ふりかゝりぬ。

起誓に呑む 熊野鳥
賛としても いつはりなき

神の宣示しめし 今いまか下くだり
見よまがつみ 裾すそに纏まとふ。

あらがはんにも 天あめの證あかし明
地の現示あらはれ まさ目めに知る
みうち廻まわる 血ちは渦うずの
波なみおこすと ひしめく聲こゑ。

大磐石だいばんじやく 踏ふみおさゆる
力ちからゆれて 細毛ほそげふるひ

魂たまの息いきは かすかなれど
消入きえいる身みの 倒たふれ伏ふしぬ。

如意珠

かばかりの 明らかに
ひすみなき 發言を
そら耳に 聞き流し
かすかにも 應なき。

億劫に 目なれては
正しきも 古びたり

古びたる 文字は日に
かきけされ 失はる。

たまさかに 眞なる
おのが座に 居なほると
信念の 次の日は
ひとしなみ もとの床。

八千尋の 水底に
我如意珠 千分して

探りしも 抱く間に
光明は 消え失せぬ。

求れば のがれゆき
近づけば うつろひぬ
あいだのめ まどはしの
主なき 家に住む。

埋宮の 奥ふかく
隠れたる 正しきを

見出んと 火ともして
はてしなく はたらかむ。

山
の
歡
喜

山の歡喜

あらゆる山が歡よろこんでゐる、
あらゆる山が語つてゐる、
あらゆる山が足ぶみして舞ふ、
あらゆる山が躍る。
あちらむく山と
こちらむく山と
合つたり
離はなれたり

出てくる山と
かくれる山と
低くなり
高くなり
家族のやうに親しい山と
他人のやうに疎い山と
遠くなり
近くなり
あらゆる山が
山の日くわんきに歡喜し

山の愛うなづに點頭うなづき
今や
山のかゞやきは
空一ぱいにひろがつてゐる。

湯の湧く麓

こんなだんぐ山に入つてきたのに
まだ人が住んでゐる。
ともすれば
低い小山の向ふは
直ぐ海のやうにも思はれ
半島らしい風が
山を越えて吹いてくる。

土の色の赤い山と
葉の色の青い木と
果實このみのよく出来さうな柔かい土の色と
その間に温泉が湧く。
村の女達も浴りに来る溪流けいりゅうの傍の温泉の豊かさ。
河の底からも
岩の間からも
木の根からも
掘れば何處からでも
玉のやうな温泉が湧きさうで

あたゝかい泉の脈が
絶えず下に流れてゐる伊豆の地よ。

ひろき胸

富士と對ひ合つて
壊れたやうな八ヶ嶽よ。
汝のひろい胸には
何をたゝんでゐるのだ。
憤りか
それとも恨みか、
反逆か

それとも怒りか、

戦ひか

それとも呪ひか。

汝は何を空に捧げやうとして

捧げそこなつたのだ。

汝が再び空中に踊り立つて

暴君の如く

狂ひ叫び

荒れに荒れる時があるやうに思ふ。

山の町

家が並んでゐる——なつかしさ

まあ綺麗な女よ

それは何といふ面白い音楽だ？

何といふ香ばしい魚だ。

髭を剃つてくれる家がある

浴させてくれる家がある、

柔らかい衣服がある、

都會の話がある。

何の道にも人が歩いてゐて

何の家の火光もあかるい。

賑かな生活が

平らな町に動いてゐる。

晝も暗く、夜も暗い山へ何うして歸れやう。

たま／＼都會から來て

町の後ろの低い山にも壓迫されるやうに感じ

河幅の廣くなつた溪流の音にも

寝つかれないといふほど

山に初心な人達よ

都會には何んなことがあるのだらう。

巖壁の群集

五月雨時の

雲のきれめきれめに

雲より黒く斷續する

信飛高原の山々。

一萬尺の空中を領する

巨人の冥想。

彼はその自然の暴虐を

人間の上に加へようとしてゐるのだらうか。

或は

威力を恃んで

人間を峻拒しようとして居るのだらうか。

或は

無關心に

自然の奥深く

隠れやうとしてゐるのだらうか。

絶大なる巖壁の群集よ。

暮色

今しも太陽は
海に似て海にあらぬ
動くに似て動くにあらぬ
不思議にもや〜と
青い靄のたゞよふ
萬壘の山の彼方に
沈まんとす。

谷間、谷間より
麓の森林帯より
暮色襲ふが如く
山頂に迫り
こゝに
築かれたる秩父の殿堂
武甲山を闇に隠さんとす。
空中より俯瞰す
一方の平野の空は
漂渺として

敷かれたる大地の
ありとしも思はれず。
いざ火を點けて
星より外に光なき
千古の階段を
降り行かん。
わが踏む大磐石よ、
幸ひに
わが歩む道を守れ。

單純なる線

そのかみ一度
熱し切つた山が
悠久の平和と
謙遜に歸り
ものなき空に
思ひ切つてゆつたりと
柔かに緊張して

地平の下までも
引いてゐるまつすぐな線――
悠遠なる時間の單純さよ。

表情

筑波山！

紫の桔梗色に見えたり

黒百合のやうに暗く見えたり

海のやうに明るく見えたり

草のやうに青く見えたり

見る度に色の變る山よ。

山の表情よ。

見なれた人達は
忘れてゐても

山の色は

また變り

また變りして

その日、その時の光線と陰影に

ありのまゝの色を現はして

いつまでも落着いてゐる筑波の山！

絶頂さして

芙蓉の山の霧裂けて

一つの蝶は地に落ちぬ。

沙は太古の火に爛れ

巖は地軸の熱を吸ふ。

金剛不壞の杖立てゝ

裾野にかへす月毛馬。

砂流るゝ山腹に

渦雲を吸ふ寒き息。

一つの蝶はうらくくと

絶頂さして上るらむ。

花の貢は

絶えたり

なほ上るべき

みちにて。

「高さ」があるを

信じて

雙の翼を

をさめず。

極めんとする

一心

虚空のはてを
つらぬく。

高山の花

平野の花は

氣まぐれな風かぜに疲れ

軽かろはづみな動物の誘惑かほに惱なやまされ

混濁した空氣の底に咲いてゐるが、

山と山との間を大潮のやうに雲がさしひきして、

雪溪の鋭さと

石の流ながれの疾はやさとに

休んでゐる巖の一角に
高山植物の
あざやかな貴族の面
地に降りない花の誇り
花の上から
白い霧、青い霧、^{きいろ}黄い霧、^{あか}紅い霧が立ち昇る。

白日の霧

峠の上に立つてゐると
大空の中を往來する
白日の霧が
雲の斷片のやうに
走つてくる。
霧に包まれたかと思ふと
もう脱けてしまつた

水の中から出たやうに

半身は冷やかに

袖寒く

雨でもなく露でもなく

水の雫が

木の繁みから落ちてくる。

山は晴れ渡つて

暗い蔭は少しもないが

何處からともなく

一團だんまた一團だん

走つてくる霧の迅はやさよ。

遠山雪

平野のはてを
すきまもなく圍繞とがたんだ山々。
雪のある山
雪のない山
山の線は
自由に延びたり
嚴肅に尖つたり

地平線を
不思議に壊くして
壊くしたまゝに
おちついて
言葉をつゞけてゐる山より山の
ながい線のゆらめき。

雪は際立まはつて
白金の舞ふやうに
ちらく、ちらくくと

晴れ切つた青い空の下を
動いて来るやうだ。

雪よ、舞へ、

山よ、立て、

あをい空で

ひろい野で

雪のある山も

雪のない山も

大きく、大きく

平野を圍んで

ながい間、黙想に包んであつた自然の心持

今こそ

晴れ晴れしく語るのであらう。

さるをがせ

白い獸けものの尾のやうに

枝から下つたさるをがせ。

動いてきた霧が

黙だまつて行いつてしまふ。

深林の奥の方に籠こもつた

わかるいくつろぎ。

ありたけの葉の表に

快い青色の満足。

楨ぶや、山毛榉やまももや、梅うめや、落葉松からまつや、

ゆつたりと

胸張り切つて吐はく息の

濃こいもや〜、淡あいもや〜、

思おひ思おひに、ものをいふ。

さるをがせ、さるをがせ、

樹林の奥のさるをがせ。

ひろくくと
 木の葉、木の枝、木の幹の
 すきま、すきまに
 舞ひ下り、
 飛びさうに、
 跳ねさうに、
 躍りさうにして——高原の
 霧と、氣流と、空翠くわいとに包まれて
 動かぬ生物、さるをがせ。

この詩集は大正七年三月、二女彌生をなく
 した時に、急に思ひ立つて一冊にまとめた
 ものです。以前の私の詩集『塔影』以後、及
 び『霧』出版の前後に作つたものが多いので
 年代の上からいふと十年の餘に涉つてゐま
 す。此集の中では「沈黙」「火の色」「炬火」など
 は前の作で、「愛のあゆみ」「山の歡喜」などは
 稍近い作です。それから又『彌生集』以後の
 作も、そのうちに一冊にしたい希望を持つ
 てゐます。

大正十年三月五日印
大正十年三月十日發

行 刷

彌生集

定價金貳圓四拾錢



著 者 河 井 醉 茗

發 行 所 東 京 市 麴 町 區 飯 田 町 二 丁 目 二 番 地 株 式 會 社 天 佑 社

發 行 者 東 京 市 小 石 川 區 諏 訪 町 五 番 地 日 岐 久 次 郎

印 刷 所 東 京 市 神 田 區 三 崎 町 三 丁 目 一 番 地 友 文 社

印 刷 者 東 京 市 神 田 區 三 崎 町 三 丁 目 一 番 地 檜 山 定 吉

